階層構造から見た性格特性語の有用性について ——基礎レベルの探索——

東京大学 山口陽弘¹・久野雅樹²

The availability of personality traits in the hierarchical structure: An exploration of the “basic level”

Akihiro Yamaguchi and Masaki Hisano (Department of Educational Psychology, Faculty of Education, The University of Tokyo, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113)

Personality traits have a structure that is hierarchically organized in terms of trait abstractness. Which level of the hierarchy is most available to the person perceiver? We started out with four levels, and tried to determine which was most available and therefore became the “basic level”, as in the Rosch, Mervis, Gray, Johnson, and Boyes-Braem’s natural categories (1976). Two methods were employed. First, rating of trait descriptiveness showed that information effectiveness was relatively high at the second level from the top. Second, subjects preferred the same level when they described target persons. These results suggested that a “basic level” indeed existed in the hierarchy of personality traits. However, social desirability of traits and who the target person was also affected the results. Implications are discussed about theories of cognitive style, especially cognitive complexity, which assume the generality of our cognitive system and have been in confusion with contradictory findings.

Key words: hierarchical structure, personality traits, big five, cognitive complexity, category availability, basic level.

我々は自己や他者の性格認知にあたり、“良い-悪い”といった極めて一般的なレベルのものから、“リーダーシップのある-引っこめ思案な”といった特定性の強いレベルのものまで、多様なレベルのカテゴリーを用いている。このように、性格特性語カテゴリー間に階層構造が存在するという議論が従来から広くなされており、近年 Hampson, John, & Goldberg (1986), 山口・河原・久野 (1995) により、性格特性語を3階層に分け得ることが、実験的な手法（非対称性判断, カテゴリー幅判断）で直接的に示されるところまで、研究は進展している。

さて、カテゴリーは一般に、複数の対象の認識時に共通部分を抽象し、差異部分を弁別する働きをもつ。それ故カテゴリーの有用性が高い（＝情報量が多く効率的な認識がなされやすい）のは、カバーする範囲（カテゴリー幅）が広く、かつ他のカテゴリーとの識別力が強い場合である。既に自然種では、Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem (1976) をはじめとし、カテゴリー階層構造中に最も有用性の高いレベル（i.e. “基礎レベル”）が存在することが示されている。この“基礎レベル”が、性格特性語にも存在するか否かを検討することが本研究の第1の目的であ

る。

John, Hampson, & Goldberg (1991) は、上述の Hampson et al. (1986) の3階層の上に、更に上位のレベル（Superordinate level; e.g. good-bad）を加え、4階層とした特性語の階層構造について、Rosch et al. (1976) の主張する基礎レベルに相当するものがあることを示した。本研究もまた、山口他 (1995) が示した階層性レベルを利用し、基礎レベルに当たるものが日本語でも存在することを実証する。

また、この基礎レベルの存在を確認した上で、認知対象となる人物によって、基礎レベルが変動する可能性も考慮する。自然種カテゴリーの場合、談話状況による基礎レベルの変動は比較的少ないとされるが、人物を表現する特性語においては、対象となる人物（target person）への熟知度、好悪によって基礎レベルとなる有効性の高いレベルが変動する可能性を否定できない。こうした文脈、状況の影響について、John et al. (1991) は特に影響が見られなかったというが、手続きに改良を加え再検討する。

以上は、性格特性語カテゴリーの構造自体を解明することに力点があるが、こうした構造を考慮することが対人認知研究、つまり“処理”の研究にも重要であることを示すのが、本研究の第2の目的である。具体的には、対象の熟知度・好悪と対人認知の多次元性についての、二つの仮説間（警戒仮説 vs. 相互作用仮

¹ 日本学術振興会特別研究員。

² 現所属：電気通信大学。

説)で見られる矛盾を解消するための視点を提示する。前者の警戒仮説とは、Kelly (1955) のパーソナル・コンストラクト理論に基づき、Bieri (1955) らが主張したもので、嫌いな人物は自分にとり危険で、その行動を正確に予測しそれに対処する必要があるため、嫌いな人物の方が多次的に認知されるというものである。一方、これと対立する後者の相互作用仮説も、同じパーソナル・コンストラクト理論に基づいており、Crockett (1965) は相互作用が多く、熟知している他者ほど多次的にとらえられるのであるから、よく知っている好きな人の方が分化性が高く、多次的にとらえられていると考え、彼自身の研究によってもそれは一貫して支持されているという。これら二つの相反する仮説が同一の理論に基づくもので、しかも双方ともに自説を支持する結果を得ているのは奇妙なことだが、性格特性語カテゴリーの階層構造に着目することで、こうした問題を解消する一つの視点を与えることができるであろう。

従来の対人認知研究では、対人認知の多次元性 (e.g. 認知的複雑性) を算出する際に、複数の性格特性語の評定値を全く等価なものとして加算的に扱ってきた。例えば、上述の認知的複雑性の不整合を解消する他の視点として、相互作用が高まる (= 熟知度が高まる) と多次元性が一時下がり、更に熟知度が高まると再び多次元性が上がるという U 字型仮説によって、このような現象が生じたとする考えもある (坂元, 1993)。確かにこれも興味深い視点であるが、仮に、“良い” という特性語に対する評定値と、“活動的な” という特性語についての評定値とがたまたま同じ値であったとしても、それが同じ意味をもつものとは到底思えない。そこに階層性という視点を導入することで、特性語への評価値の意味づけを、より実質的なものに変えることができるだろう。つまり、“多次的” という際に、どの階層レベルで多次的なのかと分析することで、上述の二つの仮説間の矛盾が解消できると考えるのである。

実験 1：叙述性から見た階層の情報量の非線形性

John et al. (1991) は、一般に情報量はレベルが下位になるほど高まる (= カテゴリー幅と情報量が負の相関関係を示す) が、その関係は非線形的であり、最上位のレベルから一つレベルを下げただけで、著しく情報量が高まるとしている (Figure 1 参照)。すなわち、最上位レベルから一段抽象度のレベルが低いこの段階が、情報効率が高く基礎レベルカテゴリーであると考えられる。この自然種カテゴリーで広く認められている現象を、性格特性語の階層構造にも見出すことが実験 1 の目的である。

方法

被験者 279 名、首都圏の私立大学生、専門学校生。

4 階層の特性語 全部で 32 個の性格特性語を素材として使う。これらは上位 (Superordinate; e.g. よい)、基礎 (Basic; e.g. 活動的な)、中位 (Middle; e.g. 自発的な)、下位 (Subordinate; e.g. リーダーシップのある) という 4 階層を構成すると想定した (Appendix 参照)。この材料設定は、基本的に BIG FIVE (Five Factor Model; e.g. 柏木・和田・青木, 1993 を参照) に基づき、五つの次元について 3 階層を想定し、更に社会的な望ましきの要因を加えた (社会的に望ましいものと、望ましくないもの) のものである。従って、5 次元 × 3 階層 × 2 通りの望ましきで 30 語が用意される。これらの素材の階層性については、既に山口他 (1995) によって確認されている。以上の 3 階層の上位に位置するものとして“良い-悪い”の二つを加えて 32 個の特性語を素材とした³。

手続き 基礎レベルを同定するにあたっては、まず情報量について操作的な定義を与えることが必要である。John et al. (1991) は、特性語の叙述性 (descriptiveness)⁴ の点から定義している。叙述性とはある特定の行動がどれだけ具体的に表現されるかというものである。最も低次の特性語 (e.g. リーダーシップのある) は相対的に叙述的な側面が強い。一方、最も高次の特性語 (e.g. 良い) は抽象的な評価的属性 (e.g. 社会的な望ましき) を示す。一般に、階層が下位であるほどその構成要素は、その上位集合のもつ性質をそのまま保持継承するため、情報量は多くなる。この情報量は叙述性の高さと言い換えることができる。但し、最も叙述性の高いはずの下位カテゴリーの有用性が、単純に高いとは限らないのは、カテゴリー幅が関

Figure 1. Category informativeness as a hypothetical function of hierarchy level.

連してくるからである。階層レベルが下がってゆく(カテゴリー幅が狭まってゆく)中で、情報量が急激に高まるところがあれば、そのレベルの有用性が最も高い。それは、階層が下位であるほどそれだけ認知的な負荷もかかるため、伝達のための認知的な経済性、有用性が最も高いのがこの部分であるからである。そこで上述の32種の材料中において、この叙述性と階層レベルとに非線形的な関係があることを確認し、基礎レベルと予想されるレベルを示す。実際の回答にあたってはすべての被験者がランダムに配列された32語の特性語について、叙述性に関する評定を7段階で行った(数値が大きいほど叙述性が高い)。

結果

結果をFigure 2に示す。叙述性について“階層性レベル×望ましき”の 4×2 の2元配置分散分析を行った(いずれも被験者内要因で交互作用を考える。各被験者について、 $4 \times 2 = 8$ つの組合せについて平均値を算出し分析の対象とした)。その結果、階層性レベル、望ましきの主効果、および交互作用のすべてが有意であった(階層性レベルは $F(3, 768) = 57.66$, $p < .0001$, 望ましきは、 $F(1, 256) = 68.34$, $p < .0001$, 階

層性レベル×望ましきは $F(3, 768) = 74.78$, $p < .0001$)。階層のレベル間で、Tukeyの多重比較を試みたところ、社会的望ましきによらず上位のレベルのみが、他のレベルよりも叙述性が低かった($p < .05$)。

討 論

全体としてはJohn et al. (1991)の先行研究に一致し、特定レベル間に大きな情報量の差があることが確認された。但し、彼らは叙述性について4階層のレベル間すべてに多重比較で差異を見出しており、その上で上位レベルと基礎レベルとの間の差異が最も大きいことを示している。それに対し本研究は、“良い-悪い”という上位の特性語が、他のレベルの特性語に比べ異質であるという結果であった。しかし、叙述性が基礎レベル以下の段階でほぼプラトーになることは示されており、階層性が低次で具体性が高く、叙述性が本来ならば上昇するべき中位・下位レベルの変化(増分)が小さい。基礎レベルを含む、上位レベルとは別のいくつかのレベルが存在することは確認できたと言えよう。

以上のように基礎レベルの存在を裏づけるデータが提示できたが、ここでJohn et al. (1991)があまり重要視しなかった点、および実験1に関して指摘できる問題点を以下にまとめておく。

まず社会的望ましきの主効果および階層性レベル×望ましきの交互作用が有意となったことである。社会的に望ましい語と望ましくない語とでは、階層構造の性質に差がある可能性がある。無論、John et al. (1991)も、望ましきの要因について完全に無視しているわけではない。彼らの実験でも、叙述性についてわずかではあるが、望ましくない性格特性語群の方が叙述性が低い傾向が見られた。この点に関し、望ましくない語(ネガティブな特性語)ほど、特定の属性を否定して叙述しているものが多いため、属性が全体として少ない印象を与えるためではないかと補足している。しかし、両者の間に質的な違いがあることまでは

³ 最上位のレベルに当たる“良い-悪い”に関しては、John et al. (1991)の研究にある語“good-bad”の訳語を用いた。彼らもそのほかに“competent-ineffective”等を挙げているが、日本語として適当なものが考えられなかったため、最上位レベルの特性語をこの2語に限った。この最上位のレベルに当たる性格特性語は、対人認知の際に最も抽象度の高く、叙述的な側面がほとんどない言葉であり、“良い-悪い”がほぼ適当であろう。但し、この2語が性格特性語に属さないという批判もあろう。しかし、本文中でも述べたが、本研究で意図するのはこの叙述性評定での結果のみから基礎レベルを同定することではなく、実験2、実験3の直接選好の状況が、この実験1の叙述性の評定値と対応するのを示すことであり、むしろ、性格特性語と呼びにくいほどの最上位レベルを材料に含めてもかまわないと判断した(実際に選好状況では最上位レベルのみが低くはない)。なお、実験1の実験材料設定の時点で、“上位”、“基礎”等の用語を用いているが、これらはもちろん実験者で想定したものにほかならない。しかし、最上位レベルが上記の理由から“良い-悪い”を利用しておりほぼ確実である点から、材料設定の時点でこのような呼称に統一した。なお、この実験者が想定したレベルがどのように確認されていったかに関しては、実験1-実験3までの探索的分析をもって説明に代えさせていただく。

⁴ John et al. (1991)は叙述性とは逆の相補的な面として、評価性(evaluativeness)も考え、評価性が高まるほど叙述性は低くなり、叙述性が高まるほど、評価性は低くなるとしている。この評価性は性格の叙述が最も抽象度を増した場合に最も高まる、一元的な属性のことである。筆者らもこれにならい、叙述性と同時に評価性もデータとしては採集し、叙述性と同様な分析を試み、評価性にも上位レベルと、それ以下の3階層間との間に非線形的な関係があり、また両者に相補的な関係があることを確認したが、誌面の制約上、割愛した。

Figure 2. Mean descriptiveness ratings as a function of hierarchy level for socially desirable and undesirable traits.

想定していないため、あまり深い検討がなされていない。本研究では、望ましい語と望ましくない語との間の階層構造が、非対称である可能性に十分配慮しつつ、以後研究・分析を進めていくことにする。

次いで、基礎-中位-下位の3階層と、上位レベルとの間の材料設定の恣意性の問題がある。この基礎レベル以下の3階層と上位レベルとの間に叙述性の断層があるのは、上位レベルが“良い-悪い”という、あまりに抽象度が高く、異質な、既に性格特性語とは言いがたいものだからではないかという批判があり得る。これについては、他者を表現する際の、特性語の選ばれやすさ（選好=preference）を調べる手続きで補完できる。そこで利用しやすい特性語は、基礎レベルと推定できるであろう。実験2では直接的な選好状況を調べ、最も選ばれやすい基礎レベルが、叙述性評定から予想されるレベルと一致することから、基礎レベルの実在性を実証することを試みる。

実験2：直接選好の状況

実験2では、異なる階層レベルに属する特性語の間でどれがより選択されやすいか（選好状況）を検討する。John et al. (1991) では、表現対象となる人物にかかわらず基礎レベルが一貫して選好されるという結果が得られている。彼らは表現すべき人物の熟知度と好悪によって、特性語の選好状況に差異が生じる可能性があるとして、人物をこの2要因から構成している。すなわち“熟知×好き”“熟知×嫌い”“非熟知×好き”“非熟知×嫌い”という4タイプの人物（更に“被験者自身”も加えたので全部で5種類）を設定した。しかし結果的に選好には差異がなかった（常に基礎レベルが選好された）という。

しかし、John et al. (1991) の結果は実験手続きに依存した可能性がある。彼らは4階層すべての中から選択をさせるのではなく、4階層中の3階層のみを示し1語を選択させた。この手続きでは、例えば下位-基礎-上位というように、階層性が明確化し、基礎レベルが顕在化しやすくなる。それ故、対象人物の熟知度、好悪にもかかわらず、常に基礎レベルが選好される原因となったとも考えられる。そこで実験2では4階層すべてを提示し、その中から選択させるという、より直接的で厳密な手続きを用いる。また実験1で指摘したように、社会的望ましきという点も慎重に考慮する。John et al. (1991) は望ましきに関して、選好状況を検討しなかったため、望ましくない語にも基礎レベルの選好が認められたかどうかについて、特に言及していない。実験2では望ましきの影響も分析対象とする。

方法

被験者 443人の首都圏の大学生、専門学校生。

4階層の特性語 被験者が行うのは、指定された他者を表現するときに、上位、基礎、中位、下位レベルの特性語の中から利用しやすい語を選択することである。本実験では八つの特性語（階層性レベルが4階層×社会的に望ましいものと望ましくないものとで2種類）からなるリストを5種類用意した。この5種類とはBIG FIVEの5次元に対応していて、一つのリストは一つの特性次元に属する語から構成されている（但し、“良い-悪い”は別ですべてのリストに含まれる）。使用した特性語は全体としては実験1と同一である（Appendix 参照）。

表現対象となる人物 John et al. (1991) と同様な5種類の人物である。熟知度と好悪の要因により“熟知×好き”“熟知×嫌い”“非熟知×好き”“非熟知×嫌い”の4種類を設定し、更に“被験者自身”を加えた。

手続き 各特性語のリストはランダム化され、5種類の質問紙が用意され、被験者はそのうちのどれか1種類に回答する。各質問紙の回答人数は各々80-95人である。課題は指定された1人の人物を思い浮かべ、その人物を表現する際に、八つの特性語中で最も適当なものを一つ選択することで、回答にあたっては、できるだけ身の回りにいる具体的な人物を思い浮かべるように求めた。これをすべての被験者が5人の人物に対して行う。

結果

被験者の各レベルの選択状況をまとめたものをTable 1に示す。対象人物すべてをまとめてみると、基礎（と実験1で予想された）レベルが選好される傾向が認められた（ $p < .05$ ）⁵。つまり、基礎レベルが下位、中位、上位レベルと比較して選好されやすかった。但し、表現すべき対象別に見ると基礎レベルの選好が見られないものがあった。例えば“熟知×嫌い”という対象人物に対しては、どのレベルが選好されやすいということではなかった。また、“非熟知×嫌い”という人物に対しては下位レベルの方が基礎レベルよりも選好されやすく、これはJohn et al. (1991) とは異なる結果を示した。

また、望ましきに関して、性格特性語を望ましい語と望ましくない語とに分類して分析した結果をTable 2に示す。望ましい語では基礎レベルが選好される傾向が見られた（ $p < .05$ ）が、望ましくない語では特にどのレベルの語が選好されるということではなかった。なお、望ましき自体の効果について見ると、望ましい語と望ましくない語の間では特にどちらが選好

⁵ 実験2の分析はすべて χ^2 検定の結果であるが、全体での有意水準が5%になるように統制して検定してある。その方法は岩原（1964）の示すRyan法を参考にした。

Table 1
Preference for Subordinate, Middle, Basic, and Superordinate levels: Average proportion
of subjects selecting each level for different targets

Target	Level			
	First level (Subordinate)	Second level (Middle)	Third level (Basic)	Fourth level (Superordinate)
Self	22.8 ^{f)}	31.7 ^{d)}	36.0 ^{a)b)}	9.6
Familiar liked	23.0	22.1	39.3 ^{a)b)c)}	15.7
Familiar disliked	28.2	26.9	24.5	20.5
Unfamiliar liked	28.1 ^{f)}	23.8 ^{d)}	39.0 ^{a)b)c)}	9.0
Unfamiliar disliked	33.3 ^{a)f)}	26.1	22.4	18.2
<i>M</i>	27.1 ^{f)}	26.1 ^{d)}	32.2 ^{a)b)c)}	14.6

Note. $N=443$.

- a) Basic and subordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 b) Basic and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 c) Basic and middle levels were significantly different ($p<.05$).
 d) Middle and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 e) Middle and subordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 f) Subordinate and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).

Table 2
Preference for Subordinate, Middle, Basic, and Superordinate levels: Average proportion of
subjects selecting each level for socially desirable and undesirable traits

Traits types	Level			
	First level (Subordinate)	Second level (Middle)	Third level (Basic)	Fourth level (Superordinate)
Desirable	13.4	12.7	21.5 ^{a)b)c)}	5.9
Undesirable	13.7	13.4	10.8	8.6
Total	27.1 ^{f)}	26.1 ^{d)}	32.3 ^{a)b)c)}	14.5

Note. $N=443$.

- a) Basic and subordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 b) Basic and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 c) Basic and middle levels were significantly different ($p<.05$).
 d) Middle and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 e) Middle and subordinate levels were significantly different ($p<.05$).
 f) Subordinate and superordinate levels were significantly different ($p<.05$).

されやすいということではなかった。

討 論

被験者は一般に、性格特性語カテゴリーを使用する場合には、基礎レベルを選好し、John et al. (1991)の結果が基本的には確認された。しかし、特性語の社会的望ましきの要因や、評定対象となる人物の嫌悪、熟知度の要因を考慮すると、必ずしも基礎レベルが常に最も選ばれやすいわけではない。既に実験1で、望

ましい特性語と望ましくない特性語とでは、基礎レベルが同様には存在しない可能性に言及した。実際に実験2では、実験者が予想した“基礎レベル”で望ましくない語は選好されていない。

また、嫌いな人物は下位レベルで記述される傾向がある。これは、“好きな人物”と“嫌いな人物”とでは、後者の方が下位レベルで記述する割合が高まるというJohn et al. (1991)の結果とも整合的である。嫌いな人物を下位レベルで表現しやすい現象は、先に述

べた対人認知研究における警戒仮説に合致すると考えられる。けれどもこの実験2の結果は、警戒仮説を一面で支持しているが、相互作用仮説を直接否定するものではない。むしろ表現対象人物に依存して、認知の多次元性が変化し得る様相を更に検討することで、両者の議論に整合性を与え得るのではないだろうか。次の実験3では、8種類の特性語中の択一選択ではなく、8語全部について“自然である”程度を尺度評定させる。その際、評定の多次元性も測定し、警戒仮説と相互作用仮説の理論的不整合が階層性の要因を導入することで解消され得る可能性を考察する。

実験3：直接評定による研究

John et al. (1991) は、基礎レベルは熟知度、好悪の影響を受けず、一貫して基礎レベルが選好されると述べた。しかし本研究の実験2では全体としては基礎レベルが選好されたものの、表現対象によって階層レベルの選好状況が変動した。実験3ではより詳細に、特性認知の多次元性（認知的複雑性）も考慮し、被験者各人の階層レベルの選択状況が、表現される人物によりどう影響を受けるかを見る。そのため特性語の択一選択ではなく、32の特性語のすべてに対し評定させる。実験2で得た全体的な基礎レベルが選好されることと、対象人物によって選好状況が変動することを確認し、更に対人認知の2種類の仮説（警戒仮説 vs. 相互作用仮説）間の矛盾を解消するのが本実験の目的である。

方法

被験者 168名、首都圏の私立大学生。

4階層の特性語 実験1、実験2で使用したものと同一の全部で5次元4階層の32個の性格特性語を用いた。

手続き 被験者は実験2と同一の5種類の対象人物（“自分”“熟知×好き”“熟知×嫌い”“非熟知×好き”“非熟知×嫌い”）を表現する際、それぞれの性格特性語がどの程度適切な感じがするか、自然な感じがするか、を7段階評定する（数値が大きいほど自然・適切）。

結果

5種類の対象人物ごとに、階層レベルの選好状況を分けてまとめたものをFigure 3に示す。このうち“自分”以外の4種の対象人物について、4階層を社会的に望ましい語と望ましくない語に分け、各々の平均値を算出した。この平均値を“階層性レベル×社会的望ましさ×熟知度×好悪”の $4 \times 2 \times 2 \times 2$ の4元配置分散分析にかけた（いずれも被験者内要因、すべての交互作用を考える）。その結果は、階層性レベル、望ましさ、および好悪で、主効果が有意であり、また

それらに関する交互作用も有意だった（階層性レベルは、 $F(3, 5330) = 17.18, p < .0001$ 、望ましさは、 $F(1, 5330) = 375.47, p < .0001$ 、対象人物の好悪は $F(1, 5330) = 75.97, p < .0001$ 、階層性レベル×好悪は $F(3, 5330) = 6.18, p < .001$ 、階層性レベル×望ましさは $F(3, 5330) = 7.25, p < .0001$ 、望ましさ×好悪は $F(1, 5330) = 3113.15, p < .0001$ ）。その反面、熟知度にかかわる要因は、主効果、交互作用ともに非有意で、熟知度が選好状況には何ら影響を与えていないと言える。なお、階層のレベル間に着目して、Tukeyの多重比較を試みたところ、好きな人物の表現において、基礎レベルの平均値のみが他の3階層に比して高い結果となった（ $p < .05$ ）。以上の結果から、階層性レベル中で、全体的には基礎レベルが選好され、それが性格特性語の望ましさ、好悪によってはシフトすること、但し熟知度は関係ないことが裏づけられる。

また、本実験の第2の目的である認知的複雑性の問題を考えるため、各被験者について各対象人物ごとの評定値の分散の総和を求めた。これが被験者各人の認知的複雑性を示す個人差変数となる。つまり、この分散が大きければ大きいほど、その特性語が多次元的に用いられていることを示し、認知的複雑性が高いことを示す。逆に、その分散が小さいほど、各特性語が多次元的に用いられていないことを示し、認知的複雑性が低いことになる。これはLandfield (1977) などによる認知的複雑性の一つの代表的測度である。

各対象人物への個人ごとの認知的複雑性（評定の分散）を算出し対象人物を要因と考え、“自分”“熟知×好き”“熟知×嫌い”“非熟知×好き”“非熟知×嫌い”を各々水準とした5水準の1元配置分散分析を試みた（いずれも被験者内要因）。その結果主効果が有意（ $F(4, 668) = 11.05, p < .0001$ ）となり、Tukeyの多重比較の結果、“熟知×好き”“熟知×嫌い”が他の3水準よりも平均値が高かった（ $p < .05$ ）。つまり、熟知度が高い対象人物を評定するときの方が認知的複雑性が高かった（相互作用仮説を支持）。

Figure 3. Mean preference ratings as a function of hierarchy level for different targets.

Table 3
Mean cognitive complexity for each target in terms of rating variance

Target	Level				Total
	First level (Subordinate)	Second level (Middle)	Third level (Basic)	Fourth level (Superordinate)	
Self	2.756	2.634	2.613	2.821	2.605
Familiar liked	3.403 ^{c)}	3.065	3.378 ^{b)}	7.875	3.275
Familiar disliked	3.568 ^{a)c)}	3.319	3.229	5.902	3.288
Unfamiliar liked	2.877	2.834	3.022 ^{a)b)}	7.232	2.890
Unfamiliar disliked	3.120 ^{a)c)}	2.983 ^{b)}	2.861	6.229	2.948

$N = 168$.

Results of multiple comparisons, for each target separately among the first, second, and third levels, are shown in the table as follows.

- a) Basic and subordinate levels were significantly different ($p < .05$).
- b) Basic and middle levels were significantly different ($p < .05$).
- c) Middle and subordinate levels were significantly different ($p < .05$).

更に、熟知度と好悪の要因と、階層性レベルとの関係を詳細に調べるために、“自分”を除く4種類の対象人物について、階層レベルごとに認知的複雑性を求めた (Table 3 参照)。但し、下位、中位、基礎レベルに関しては各々10の性格特性語の分散を指標としているのに対して、上位レベルにおいては二つの性格特性語の分散を指標としているので、上位レベルの値とそれ以外の値とを直接比較することには無理がある。そこで、下位、中位、基礎レベル間のみを対象として3水準とみて、“階層性レベル×熟知度×好悪”の $3 \times 2 \times 2$ の3元配置分散分析を行った (いずれも被験者内要因、すべての交互作用あり)。この結果、階層性レベル、および好悪に主効果が見られたが (階層性レベルは $F(2, 334) = 5.69$, $p < .01$, 好悪は $F(1, 167) = 3.02$, $p < .01$), 熟知度には主効果が見られなかった ($F(1, 167) = 1.23$, $p = .27$)。更に交互作用は、階層性レベル×好悪 ($F(2, 334) = 11.41$, $p < .0001$), 階層性レベル×熟知度 ($F(2, 334) = 3.81$, $p < .05$), 階層性レベル×好悪×熟知度 ($F(2, 334) = 4.34$, $p < .05$) が有意となった。Tukeyの多重比較の結果、嫌いな人物の場合は、下位レベルの方が中位、基礎レベルより認知的複雑性が高かった ($p < .05$)。これは一面で警戒仮説を支持するものである。

討 論

実験3でも全体的には基礎レベルが他のレベルに比べて、人物を表現する際に適切で自然な感じがすることを示せた。被験者は一般的には基礎レベルを選好する。但し、社会的に望ましくない語は、人を表現するときには比較的避ける傾向がある。実験2ではこの点はそれほど顕著ではなかったが、実験3では、認知対

象となる人物によっては (特に嫌いな人物)、各レベルの選好が平準化される (基礎レベルの選好が見られない) 場合もあった。これは望ましい語と望ましくない語が必ずしも同様な階層構造ではない可能性があるという実験1, 実験2の指摘を支持するものと言える。

実験2で認められた警戒仮説は、実験3の自然さ評定で確認できず、嫌いな人物に対して下位レベルの自然さ評定が特に高い傾向は見られなかった。警戒仮説が選好状況では直接的に支持されなかったのは、嫌いな人物への評定は相対的に“望ましくない”語で評定されるため、その望ましくない語の自然さ評定値が全般に低く、床効果で下限に達したためではないかと考えられる。

次に認知対象と認知的複雑性との関係を検討すると、熟知している対象の方が認知的複雑性が高まり、相互作用仮説を支持する結果である。その上で各対象人物ごとの認知的複雑性を、階層レベルに分けて考えると、嫌いな人物に対しては確かに基礎レベルより下位レベルでの認知的複雑性は高くなっていた。つまり択一の場合に下位レベルによる表現を選好するという実験2の結果と抵触せず、警戒仮説も支持する結果であった。

総合的討論

基礎レベルの有用性、選好状況を実験1から実験3まで検討してきた。John et al. (1991)の研究もその進行は探索的で、彼らも当初は性格特性語に関して基礎レベルを同定することには懐疑的であった。それは第1に特性語の階層性が、実験者の設定した恣意性の強いものであり、第2に性格の叙述には文脈要因を考

慮に入れることが不可欠で、叙述すべき対象によって選好されるレベルが変動するのではないかと思われるためである。しかしこの両者を考慮に入れても、基礎レベルが存在することを彼らは示した。

本研究でも第1の問題点には次のように反論できる。たとえ本研究で示した4段階からなる階層構造が、実験者の恣意に基づくものであったとしても、叙述性に代表される性格特性語の構造的な属性（情報量）の非線形性と、実際の選好状況とが対応することが示されている。この情報量の非線形性と選好状況との対応自体は、階層の数や次元内容を改変することで恣意性が解消されても本質的に維持される性質のものである。つまり本研究の意義は、カテゴリー幅が狭まる際に、情報量の増加率が最も高まる（情報効率の良い）レベルのカテゴリーを人間は選好することを、実際的な材料を用いて示したことが重要なのである。従って、実際の性格特性語の構造が4階層しかないとは断じているわけではなく、本研究で示した基礎レベルが確定的なものであることを主張したいわけでもない。

第2の文脈要因に関しては、John et al. (1991)と異なり、特に好悪に関して選好状況のシフトが生じた。実験2では、“嫌いな人物”を評定するときは下位レベルを選好する傾向が見られ、これは対人認知研究で警戒仮説といわれるものと合致するであろう。一方、実験3では、“嫌いな”人物に対しては各レベルとも選好状況が平準化するという結果で、実験2の結果は直接には再現されなかった。これは嫌いな人物は“望ましくない”語で評定されるが、その語の自然さが全体に低く、評定値の床効果によって差異が生じなかったためであろう。しかし、望ましさ、好悪により階層性レベルの選好にシフトが生じることは明らかであり、文脈要因を考慮する必要があるという点では実験2、実験3ともに一貫している。望ましくない語については、カテゴリー幅と叙述性にたえ非線形的な関係があったとしても、そこに基礎レベルを見出しにくい。望ましくない語に関しては本研究のみで基礎レベルを同定するのは難しく、今後の研究が待たれるところである。

文脈要因と関連する問題として、本研究の第2の目的である、対人認知の相互作用仮説と警戒仮説の関連についてまとめておく。実験2では嫌いな人物に対して下位レベルを選好するという警戒仮説が支持され、実験3では熟知している対象人物に対して認知的に複雑（多次的）な反応を被験者各人がしているという相互作用仮説が支持された。これは一見相反する現象

だが、警戒仮説を嫌いな人物に対して“より詳細に細部に関して叙述することを選好する”側面をとらえたものとし、相互作用仮説を熟知するほど“よりさまざまな階層で多次的な反応をする”側面をとらえたものと考えれば解決する。嫌いな人物は相対的に下位の階層で叙述するので、下位階層の認知的複雑性は基礎レベルよりもむしろ高い。しかし、熟知している人物に対しては特定階層に選好が集中せず、広い階層を選好するので、認知的複雑性は全体として大きくなる。これまでの両者の相反する仮説は、性格特性語の階層レベルを統制してこなかったために生じた現象と考えられる。実際に実験3でも、対象人物を嫌いな人物に絞り、下位レベルと基礎レベル（および中位レベル）とを比較すると、下位レベルが他のレベルよりも多次的な反応をしており、警戒仮説が支持されるのである。すなわち、警戒仮説は階層レベルの点での選好状況を意味し、嫌いな人物の叙述には相対的に叙述性の高い認知が選好されることを指している。一方、相互作用仮説は階層性を無視しており、すべての性格特性語への評定値を同一のものとして扱い、それらをすべて加算して多次元性をとらえている。それ故熟知度の高い人物に対しては細部から大ざっぱな点までまんべんなく評定するので、総合してみると複雑な反応をしていることになるのである。このように考えると両者の矛盾は解消できるのではないだろうか。

本研究では認知的複雑性を、認知スタイルの一つである個人差要因としてとらえるというよりは、むしろ認知対象に依存する被験者の反応としてとらえてきた。認知的複雑性を考えるにあたって、過度にその測定値を一般化してきたのがこれまでの諸研究の混乱の一因ではないだろうか。認知対象と認知主体とが相互作用するものとして認知的複雑性を限定的に考えていくことが、認知的複雑性に関する諸議論間の混乱の解消につながるであろう⁶。そのために階層構造を統制した性格特性語を用意し、熟知度・好悪を統制した対象人物による Grid Technique が模索される必要がある。より多くの性格特性語素材の階層構造を整理し、性格特性語の基礎レベルを同定する作業を、更に進めていくことが望まれる。

引用文献

- Bieri, J. 1955 Cognitive complexity-simlicity and predictive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 263-268.
- Crockett, W. H. 1965 Cognitive complexity and impression formation. In E. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research*. Vol. 2. New York: Academic Press. Pp. 47-90.
- Hampson, S. E., John, O. P., & Goldberg, L. R. 1986 Category breadth and hierarchical structure in per-

⁶ Grid Technique によって測定する認知的複雑性に関する議論は他にもさまざまな問題を抱えており、その詳細をここですべて論じることはできない。山口・久野（1994）がそれを論じているので、参照されたい。

sonality: Studies of asymmetries in judgements of trait implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 37-54.

岩原信九郎 1964 新しい教育・心理統計 ノンパラメトリック法 日本文化科学社

John, O. P., Hampson, S. E., & Goldberg, L. R. 1991 The basic level in personality-trait hierarchies: Studies of trait use and accessibility in different contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 348-361.

柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦 1993 性格特性の BIG FIVE と日本語版 ACL 項目の斜交基本因子パターン 心理学研究, **64**, 153-159.

Kelly, G. A. 1955 *The psychology of personal constructs*. New York: Norton.

Landfield, A. W. 1977 Interpretive man: The enlarg-

ed self image. In A. W. Landfield (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Personal construct psychology*. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 133-152.

Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D., & Boyer-Braem, P. 1976 Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology*, **8**, 382-439.

坂元 章 1993 「認知的複雑性」と「社会的知覚システムの進展」 風間書房

山口陽弘・久野雅樹 1994 認知的複雑性の測度の多面的検討 東京大学教育学部紀要, **34**, 279-299.

山口陽弘・河原哲雄・久野雅樹 1995 性格特性語における階層構造の実証的研究——カテゴリー幅とクラス包含判断の非対称性—— 心理学研究, **66**, 1-9.

——1995. 7. 7 受稿, 1996. 1. 20 受理——

Appendix
Terms used for each hierarchy level

First level (Subordinate)	Second level (Middle)	Third level (Basic)	Fourth level (Superordinate)
リーダーシップのある (leadershipful)	自発的な (voluntary)	活動的な (active)	良い (good)
引込み思案な (retiring)	控えめな (modest)	内気な (shy)	悪い (bad)
くよくよしない (unnervous)	ゆったりした (relaxed)	穏やかな (calm)	良い (good)
傷つきやすい (jumpy)	神経質な (nervous)	敏感な (insecure)	悪い (bad)
面倒見の良い (charitable)	親切な (generous)	やさしい (kind)	良い (good)
とげがある (stinging)	怒りっぽい (touchy)	攻撃的な (aggressive)	悪い (bad)
礼儀正しい (polite)	几帳面な (methodical)	真面目な (honest)	良い (good)
人のせいにする (untrustworthy)	無責任な (irresponsible)	いい加減な (perfunctory)	悪い (bad)
美的感覚の鋭い (aesthetic)	多才な (versatile)	好奇心の強い (curious)	良い (good)
視野が狭い (narrowminded)	鈍感な (dull)	無関心な (indifferent)	悪い (bad)